

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2491300097		
法人名	株式会社おりがみ		
事業所名	グループホーム福ふく		
所在地	三重県名張市赤目町丈六243-1		
自己評価作成日	令和2年12月24日	評価結果市町提出日	令和3年3月1日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2491300097-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2491300097-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 3 年 1 月 22 日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の想いに寄り添った支援を心掛けている。  
利用者・スタッフ共に楽しめるレクリエーションの充実を図っている。  
職員間での助け合い精神を心掛け、ストレスの軽減に繋がっている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

敷地内に同法人のグループホームが隣接しており、事業所はイベント・会議など何ごとにも連絡・情報の共有を図り、明るく楽しい事業所づくりに取り組んでいる。今年はコロナ禍の影響で外出・家族・知人との面会も制限された。その中で管理者・職員は、室内のレクリエーションに力を入れ、体操・手芸品作り・おやつ作りなどの回数を増やす工夫をして、利用者の楽しみごとや気分転換などの支援に取り組んでいる。看護師資格を持つ管理者は、利用者家族に対しても利用者の身体状況を細かく電話や便りなどで報告し、家族から信頼を得る事業所である。又、職員教育にも力を入れ、有資格保持者が多い事業所でもある。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護支援の統一を図るためにも、日々利用者と接している現場の職員間の声を基に、現在作成中である。	法人の理念とは別に、日々利用者と接している職員が意見を出し合い作成した事業所独自の理念がほぼ出来上がり、新しい理念に向けて全職員が共有して実践に取り組む予定である。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で、赤目市民センターによる地域参加型カレーや赤目夏祭りへの参加、ボランティアの受け入れや獅子舞の来訪など見合わせている。	コロナ禍で地域のイベントや、中・高生の職場体験・ボランティア訪問も中止となったが、工夫をして地域との関係が続けられるように努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナの影響もあり現在は活かしていないが、今後は近隣の施設職員と打ち合わせの途中であった認知症カフェの開催に向け本格的に取り組んでいきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの影響で、紙面上での報告にとどまっている。	市担当者・町の保健室・民生委員・利用者家族・その他の参加で2か月ごとに開催していたが、昨年2月を最後にコロナ禍の影響で中止し紙面報告とした。参加者からいただいた助言や意見をサービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	特に、相談事や不明な点があればその都度連携をとっている。地域密着型ということで、身寄りのない利用者を受け入れる時など協力体制を強化した。	介護保険の更新・利用者の状況報告・事故報告書などの提出に管理者が訪れ、その都度、助言・相談を得るなど協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	離棟予防のための玄関の施錠、モニターの設置センサーマット・コール対応、気になる事例があればその都度職員間でディスカッションしている。	毎月の職員会議で身体拘束のマニュアルに沿って、ミニ研修会を行っている。管理者・職員は「何が拘束に当たるのか？」を、常に意識しながら理解を深め身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者が研修で得た内容を基に虐待についての勉強会と、特に起こりやすい虐待内容を作成し掲げている。気になる言動があれば、その場で指導を心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は認知症対応型実務者研修や管理者研修にて学ぶ機会があったが、支援までには繋がっていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明し了承を得るように努めている。入居時までに疑問点などあればいつでも連絡するよう促している。一度、契約書の見直し・改善を図った。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	今までは面会時に生活状況や身体の状態を伝えるときに家族の意見や要望を聞き取っていたが、コロナの影響で現在は表出する機会を十分持っているとはいえない。	コロナ禍で家族との面会に制限があるが、「福ふく写真」を送付し利用者の状況報告をすることによって家族との会話が増え、意見や要望を聞く工夫をしている。職員の名前を知りたいと要望があり、制服(エプロン)に名前を入れた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃より、運営に関して職員間でも意識を持ってもらえるよう働きかけている(例えば職員より希望の購入品を聞き取り検討したり、職員へ節電を働きかけている)。代表による処遇改善加算に関する職員への説明を行う。	管理者は自己評価表を基に個別面談をしている。日ごろから職員→リーダー→管理者へと意見や提案の伝達システムが出来ている。出された提案などは運営やケアサービスに反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	評価制度を用いて処遇改善加算に反映させている。労働基準を参考に給与水準の見直しや休み希望も聞き入れている。費用を支援し、資格を取得しやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者から各職員のスキルや性格を聞き取りながら、最適な現場の進め方を改革している。ヒヤリハットや事故報告書を基にカンファレンスを開き、トレーニング・指導を行うことを進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの影響で、現在は取り組めていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新規利用者とのコミュニケーションを積極的に図るよう心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み時や契約時に情報を得よう心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要に応じてリハビリの導入や訪問診療医への打診を図ったり福祉用具の検討に努めている。入院や入所先からの入居時は、事前に地域連携室職員・看護師やケアマネとコンタクトを図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自身で出来ることはしてもらったり、なるべく本人の生活ペースに合わせるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族間での手紙のやり取り、ライン電話で話せる環境づくり、担当職員から挨拶の手紙を出す際に本人の状況をお知らせしたり、本人から家族への年賀状作成のお手伝いを心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響で、見合わせてもらっている。	コロナ禍の関係で家族・知人などの面会は制限したが、窓ガラス越し面会、電話やオンライン、伝言などの方法でなじみの関係継続の支援に努めている。毎年、年賀状は書いて出している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中はなるべくフロアで利用者が集い関わりが持てるよう、全体でのレクリエーションを工夫したり、トランプ・塗り絵・編み物など興味のあることをしながら過ごしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後の関わりは出来ていない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人とのコミュニケーションを介して、また入居時やケアプラン内容の説明時に家族から聞き取り把握するよう努めている。	管理者・職員は、1対1で話せる時間(起床・就寝・入浴介助時)などを作り本人の意向の把握に努めている。困難な場合は表情や行動からくみ取っている。常に利用者に寄り添い、本音を聞き取り、全職員で共有し個々に合った支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、家族を始め地域連携室職員や看護師・ケアマネからの聞き取りや記録類からの情報収集、本人とのコミュニケーションも図り把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の介護ケアを行う中で現状把握に努め、職員間での情報共有に徹している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネが作成する介護計画に並行して、日々利用者として接している職員間でも適宜ミーティングを開催して計画書を見直しケアマネと連携を図る。作成したケアプランを家族に説明、家族の意向も確認し反映させていく。	家族との介護計画の話し合いは、利用者の受診時や電話などで聞き、毎月の職員会議で担当職員の意向も取り入れながらモニタリングをしている。計画の見直しは介護支援専門員が纏めて現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	口頭や紙面上での引き継ぎを徹底し職員間での情報共有に努めているが、情報の周知が不十分な時もあり、適宜開催しているカンファレンスでカバーしているところがある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	取り組めていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの影響もあり、取り組めていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後は近医のかかりつけ医を持ち、職員にて定期受診や緊急受診時の同行、訪問診療時の支援をしている。協力医療機関とのコンタクトを密に連携を図っている。	利用者全員が従来からのかかりつけ医で、受診は家族または職員の対応でしている。利用者の健康管理、訪問看護師の派遣(24時間訪問)、その他の連絡・対応など協力体制が確保されている。内服管理は飲み込むまで職員による2重3重の確認をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師資格を有する管理者や、週一回訪問し状態観察をしている訪問看護師に適宜相談・指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は医療職員へ情報提供し、担当医によるインフォームドコンセント時には家族と共に参加し、今後の治療方針や入院生活についての不安を軽減出来るよう努めている。医療職員とはお互い相談し合える関係づくりが出来ている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りについては入居時と状態変化時に適宜家族の意向を確認するようにしている。協力医や訪問看護師とも情報共有や連携を図っている。不安を軽減するためにも、職員への勉強会を今後も続けていく。	入居時、本人・家族に看取り指針を文章で説明している。重度化し医療行為が必要になった場合は再度、家族と話し合いの場を設け、主治医の指示の下、訪問看護師とも連携し、看護師資格を持つ管理者・職員で事業所として出来る限りの支援に取り組んでいる。今までに数名の看取りをした。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	新しく入った職員もいるため、消防職員による救命講習の受講や、急変時の救急搬送の判断・初期対応、連絡体制の整備・周知についての勉強会を、今後も定期的に開催していく。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	実施出来ていない。消防署員には立会いの下、訓練を実施したい旨を伝えており調整中である。	消防署立会いの下での訓練はしていないが、防火管理者の資格を持つ管理者が職員会議時に地震と火災を想定し、利用者一人一人の避難経路の確認をしている。今後消防署の協力を得て消火器の使い方も含めて避難訓練を実施する予定である。	災害は何時起こりえるかわからず待ってられないので、訓練を通じ夏場・冬場の停電時も含めて何が問題となるかを洗い出し、具体的な対策を構築されるよう期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃より人格の尊重やプライバシーを守る対応を心掛けているが、職員の気持ちに余裕がない時や、慣れ親しんだ環境なども相まって対応が不十分な時もある。適宜、個別に職員へ接し、振り返りを行ってもらっている。	職員には入社時に個人情報やプライバシー保護の研修をしている。利用者一人ひとりの気持ちを大切に無理強いないケアに努め、気になる対応があると管理者は、その都度、職員と話し合い個々に沿った支援に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	業務上、職員のペースに合わせがちだが、利用者の生活ペースに職員サイドが合わせていけるような配慮や工夫が必要である(服選びや食事・入浴時間など)。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の利用者の生い立ちを把握し、それを基に思いや希望に沿った支援に繋いでいけるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1回利用の訪問散髪を始め、毎朝整容のチェックをしている。興味のある方には、マニキュアのお手伝いもしている。適宜衣類のボタンやゴムの補強、ほつれや毛玉のチェックも行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備は難しいが、出来る方には下膳や皿洗い・皿拭きをしてもらっている。手作りのおやつ時には、一緒にお手伝いしてもらう時もある。	業者からメニューで調理された食事が届き、ごはん・汁物は職員が手作りしている。利用者は下膳など出来る範囲で手伝っている。誕生日の手作りケーキや行事食は大好評で、美味しさを味わってもらう工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事摂取量や水分出納が周知出来るよう記録している。嚥下状態により食事形態・とろみの検討や介助方法の工夫もしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	日々の歯磨き・義歯洗浄、訪問歯科医による口腔清掃も定期的に行われているが、協力を得られない利用者に対してはケアが不十分になりがちで、歯科医に相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	食後や排泄チェック表・個々の排泄パターンに応じてトイレ誘導を行っている。夜間はオムツ対応も、日中はリハビリも兼ねてトイレでの排泄支援を行っている。	高齢化に伴い布パンツ使用者は少ないが、一人ひとりの力を大切にしてトイレでの排泄を支援している。利用者の生活リズムと排泄チェック表でどの対応が一番良いかを管理者・職員で検討し、自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックにて水分摂取を促したり、適宜腹部マッサージや温湯法を心掛けている。内服コントロールされている利用者も多い。手作りのヨーグルトを定期的に摂取してもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回のペースで午前中に入浴かシャワー浴、その他足浴を取り入れている。本人の拒否がない限りは職員の業務の都合上、曜日や時間を決めてしまいがちである。	浴室の脱衣場が狭く、併設している休業のデイサービスの浴室に手すりなどを増設して使用している。週に何回と決めず、利用者の希望や体調を考慮しながら入浴支援をしている。入浴剤など入れて寛いだ気分を味わってもらう工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の習慣に沿って休憩時間を取り入れるようにしているが、日中に寝ると夜間寝られないからと職員の都合で起こしている姿も見受けられる。居室内の温湿度管理や衣類・掛け物の調整も図っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬準備・服薬直前・服薬後のダブルチェック体制の徹底と、新しく処方されたり変更があった場合の情報の周知を図っている。完全に飲み込むまでの確認もしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生い立ちに関する情報を集め、興味のあることから役割分担へ繋げたり、楽しみごとが広がればと考えているが、現状は充分とは言えない。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの影響と寒さもより積極的な外出支援は難しいが、利用者が集まり中庭でくつろいだりひなたぼっこする姿はある。	以前は散歩やドライブによく出かけたが、今はコロナ禍で不要な外出は控えている。天気の良い日は中庭で外気欲を楽しみながら炭火で焼き芋をした。管理者は室内の過ごし方に力を入れ、月別担当職員と共に利用者の気分転換、ストレス発散となるように支援している。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居時に貴重品があれば、家族へお返ししている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナの影響で面会が出来ないため、オンラインでの電話や手紙でのやり取りを積極的に支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	特にコロナの影響を踏まえ、共用空間の消毒や換気は定期的に行っている。利用者・職員とで作った作品を飾ったり、季節感のある壁飾りで明るい環境づくりを心掛けている。	バリアフリーの玄関から洗面所・トイレ・フロアに至るまでしっかりとコロナ禍対応(消毒用)がしてある。写真説明ではあったが、天窓があり採光に配慮してフロアが明るい。壁には職員との共同作品の折り紙を飾り、四季を感じてもらおう工夫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士のトラブル時は席替えを検討したり、ソファの設置で独りの空間の確保や、気の合う者同士の居場所となるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、家庭で慣れ親しんだものを持ち込んでいただくようにしている。家族の写真が増えていく利用者も多い。	事業所としてエアコン・電動ベットが設置してある 他は本人が使い慣れた家具や思い出の品々が家族の協力を得て持ち込まれている。窓から見る景色が好きで、のんびりと外を見て過ごされる利用者も多い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯干し・たたみ、皿拭き、掃除など個々の利用者に応じた役割を担っていただいている。		